



さくら 2005 冬

発行
社会福祉法人 東桜会
第 5 号
〒420-0962
静岡市東 527 番地の 1
特別養護老人ホーム 麻機園
TEL 054(247)8739
FAX 054(247)8640

ご挨拶

社会福祉法人東桜会 理事長 長谷川達也

明けましておめでとうございます。

東桜会も多くの方々のご支援と職員の皆様の努力により、順調に推移しておりますことを心から感謝致します。

平成17年は記念すべき変革の年になります。4月から静岡市は長年の懸案であった全国14番目の政令指定都市になります。県並みの権限を持ち、葵区、駿河区、清水区の誕生により都市構造も変わり、併せて福祉を取り巻く環境も大きく変わるものと思われまます。

介護保険制度の5年次に当たり、改正案が断片的に情報として流れてはくるものの、全体像が掴めるのは相当先になると思われまますが、現在より厳しくなることが間違いなく予想されます。65才以上の高齢者が毎年全国で65万人増え続けている状況下では、多少の変革はやむ得ないと思われまますが、福祉の本質を見極めた改正であってほしいと思われまます。

このような厳しい環境の中にあっても、福祉に求める多くの方々の期待に応えられるよう、一日一日の小さな親切の積み重ねが「信頼」という大きな財産をつくるということを職員の皆様はよく理解して欲しいと思われまます。

今年も一年、皆で頑張りましよう。



おめでとう！

正月の飾り付けをしたさくらの広場で“新春の集い”を行いました。

おとそを用意し、着物姿の寮母が一人一人について皆で乾杯!! 今年一年の健康をお祈りしました。そして、染之助染太郎を真似た寮母コンビの出し物、傘まわし・皿まわしの披露には拍手喝采、ふたりの掛け合い漫才は笑いを誘いました。拍子に合わせて獅子舞が登場すると、驚いて怖そうによける方、頭をなでる方などさまざまでしたがとても好評でした。また、正月の歌を歌い、写真撮影と、楽しいひとときを過ごしました。



“新春の集い”平成17年 元旦

おいしく食べてもらうために

ケアハウス桜花 栄養士 浅見夕子

おいしい食事、健康的な食事、理想的な食事などの情報を簡単に得ることができる社会で、栄養士として“何ができるか？”“何を学ぶべきか？”迷うことがあります。そんな時は利用者の皆さんからいただく言葉の意味をよく考えるようにしています。厳しい言葉であったり、優しい言葉であったりと様々ですが、経験を積み重ねてきた方々の意見を聞きながら仕事ができることは、とても有り難いことと感じまます。

皆さんとのやり取りの中で、栄養士という仕事で大切なことは“よい食事とは何か？”を考えることより、私と利用者との“1対1の信頼関係”ではないかと考えるようになりました。子どもの頃、無意識で母さんの作ってくれたご飯を食べていたときの安心感を提供したい。そのために私の人柄を知っていただき、また、皆さんの人柄を知ることによって、私の仕事が意味を持つてくるのだと思われまます。

これからも皆さんと良い関係を築きながら、良い食事へとつなげていきたいです。



もう一つの家族

- デイサービスセンター <痴呆型> 介護職員 白鳥裕子 -

私のおじいちゃんは痴呆でした。介護保険はなく、家族の誰もが初めて接する痴呆に戸惑いを感じながらも母を中心に介護をしていました。しかし当時高校生の私には、おじいちゃんの行動が理解できず精神的に疲れたときもありました。足腰が丈夫ですぐ出掛けてしまうおじいちゃん。自営業の為、「昼間だけでも見ていてくれる人がいると助かるのにね」母とよく話したことを思い出します。



その後、福祉とは全く別の道を歩んだ私でしたが、麻機園デイサービス痴呆型に勤務して4年になります。皆さんに「痴呆の方と何をしているの?」とよく聞かれます。特別な事は何もしていません。昼食の準備や片付け、雑巾を縫ったり洗濯物をたたんだり、時々ドライブに出掛けたりと普通の毎日を利用者と力を合わせて過ごしています。職員と利用者の関係ではなく、孫になったり、母になったり、嫁や、昔からの友達だったり、その時々で関係は違いますが、私にとって利用者は職員も含めてもう一つの家族です。本当の家族に近づけるよう、また安らぎの場所となるよう、お役にたてればと思っています。

考えてみては?

- 静岡市有永グループホーム 介護職員 海野園江 -

痴呆ケアの問題は今に始まったことではなく、昔も痴呆症の人はいたと思います。かつては病気として認知されなかったり、今より寿命も短く、痴呆になってもそのまま住み慣れた場所で老いていきました。

私の祖母も痴呆でした。私の顔を見て母の名前を呼び「家に帰る」と風呂敷包みを持って歩いていったものです。それが日課になっていたような祖母を、家族や近隣の方がよく理解してくれており、祖母は安心して暮らしていたことを思い出します。



しかし、現代の核家族、女性の社会進出、少子高齢化の社会状況の中で、痴呆症になられた方、また、その御家族を取り巻く環境も大きく変わりました。グループホームに勤務して5年目になりますが、利用者の行動、言動に悩みながらも、感動したり、笑ったりして共に生活をしています。そんな毎日の中で大切なことは「心地よく安心できる」と思っていたことです。痴呆になられた方は、はかり知れないほどの不安をいただいています。自分の場所があって、顔なじみの人がそばに居てくれる、話を聞いてくれる、自分のペースで時間がゆっくり流れている、そんな生活の支援ができたと思います。

2015年には、団塊の世代が高齢者となり痴呆性高齢者も益々増えると言われており、私もどんなグループホームに入居したいかと老後について考える事があります。職員は優しく笑顔。「みんなで一緒にやりましょう」より、「海野さんは何が好きですか?」と自分を認めてくれる生活を求めます。

皆さんはどんなグループホームに入居されたいですか?

変わり者?

麻機園 寮母 坂本 晃

今から十一年前・・・

「坂本は進路、どうするんだ?」「はい、福祉の学校に行きます。」・・・先生沈黙
「おい!真面目に話せ!」「だからマジです。」こんなやり取りが五分続くと「分かった。もついいからこ両親の都合のいい日はあるか聞いて来い!」

小学生から続けてきたサッカーを引退して学校生活もいよいよ加減だった時期、人生で初めてサッカー以外のことを真剣に考えた。『なぜ、福祉にしたのか?』それはサッカーのように刺激が欲しかった。今までは逆のことをしよう、仲間が考えないことをしようと思っただけでそれだけでいい。(親、親類にはかなり反対された・・・)

地元の特養で働き始めた十年前は、まだ福祉系の専門学校を卒業した男性は珍しく、やる気、自信ともに満々でした。「俺がこの施設を変えてやるぜ!」と生意気な方だったでしょう。当時の上司とやり合い反省文もよく書きました。今でも反省してないことを恥ずかしく思っています。現在も変わらず、わがままに仕事をして皆さんに迷惑をかけているかもしれません。(ごめんなさい)

「坂本君は変わっているね。」と言われると嬉しいです。先にも書きましたが、人と同じことが嫌いです。だから、他人とは違う視点や発想を心掛けています。例えば、施設には多くの方が暮らしているので、お互いの好き嫌いや喧嘩はあります。それは一見問題のように思えますが、一般社会の中では当然起きること、人として当たり前の大切な感情です。全てを排除せず、ケアしていきたい。マインナスに思えることも視点や発想を変えてプラスにする、そんなケアをしていきたい。

「クールヘッド、ホットハート」恩師の言葉です。今もこの言葉を胸に仕事をしていきます。十年働いて思うことは、サッカーも福祉も同じで楽しい!でも、奥が深く、毎日精進が必要です。